



Title	『ツイプリアーヌスの鏡』：シュトルムにおける継母問題
Author(s)	山城, 貴茂
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2004, 38, p. 61-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47923
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ツィプリアーヌスの鏡』

— シュトルムにおける継母問題 —

山城 貴 茂

I

ドイツ写実主義文学の作家として知られるシュトルム (Theodor Storm 1817-1888) は、その散文作品においては主に短編小説 (ノヴェレ) の分野をその活躍の舞台とした。代表作として名を挙げられることの多い『みずうみ』や『白馬の騎手』などはこのジャンルに属する。しかし、一見すると「写実主義」とは相容れそうもないメールヒェンという分野でも、必ずしも数は多いとは言えないものの、興味深い作品を彼は残している。もっとも彼は若い頃、友人たちと共同で民話・伝説などの収集に力を入れていたこともあり¹⁾、その意味では、彼がメールヒェンを書くというのはそれほど不思議ではないのかもしれない。また、この民話・伝説収集が彼の作家・詩人としての活動の一つの原点だったということは、彼がやはり強くロマン派的な想像力の影響下にあったという事実を証しているとも言えよう。

さて、そのシュトルムのメールヒェン群の中で特に重要と思われるのが、『三つのメールヒェン』*Drei Märchen* である。これはその表題の通り、三つの作品から構成されている。『雨姫』*Die Regentrude*、『ブーレマンの家』*Bulemanns Haus*、そして『ツィプリアーヌスの鏡』*Der Spiegel des Cyprianus* の三篇である。1860年代前半に次々と執筆されたこれらの作品は、1865年に一冊の本にまとめられ、上記の表題を冠せられて出版された

のであった。ちなみに、『三つのメールヒェン』は1873年に『樽物語』*Geschichten aus der Tonne*として改めて世に問われることになる。

「メールヒェン」と銘打ってはいるものの、『三つのメールヒェン』に収録されている物語の中で、およそ本当にメールヒェンらしいものは、おそらく『雨姫』くらいのものであろう。シュトルム自身もこのことは自覚していたらしく、このメールヒェン集の序文においても読者に対してしっかりと釘を刺している。彼によれば、『ブーレマンの家』は「奇妙な物語」と呼んだほうがよからうし、『ツィプリアーヌスの鏡』では「伝説の持つ高貴なトーンが響いている」(IV385)という²⁾。

本稿で中心的に考察するのは、「伝説」の雰囲気をつたえた『ツィプリアーヌスの鏡』であるが、その前に、他二編のメールヒェンに関しても、簡単にその概要を述べておく。

『雨姫』は、早魃に襲われた地方を舞台とする。早魃によって被害を受けている若者アンドレースと早魃を金儲けの好機と考える父を持つ少女マーレン。この恋仲の二人は、早魃の原因が、雨を司る「雨姫」と呼ばれる精霊が眠り込んでしまったことにあると知る。彼らはお互い力を合わせて雨姫の寝所への困難な道程を克服し、ついには彼女を目覚めさせることに成功する。雨姫は覚醒し、再び雨が大地を潤す。アンドレースとマーレンは結ばれ、物語は大団円を迎える。

雨姫のような精霊、彼女の不在をいいことに猛威を振るう小人「火男」、木の洞から入り込む異界等々の様々なメールヒェンの道具立てとともに、異界において試練を果たし元の世界に帰還するという、きわめて素直な冒険物語の構造を踏襲したこの作品は、三篇中、おそらくは最も親しみやすいメールヒェンであるといっても過言ではあるまい。

『雨姫』の明るい雰囲気とは対照的なのが、二つ目に配置された『ブーレマンの家』である。これは、「メールヒェン」というよりはむしろ「怪談」

とこそ呼ぶべき作品である。主人公が自らの罪によって招来したおぞましい怪異が仮借なく描かれている。主人公はブーレマンという守銭奴である。あるときブーレマンの元を病気の子供を連れた姉が訪れる。彼女は、質草として取り上げられてしまった銀の杯を返して欲しいと頼み込む。その銀の杯があれば子供の病気が治るというのだ。しかし、親族とはいえ、金のないこの母子にブーレマンは銀の杯を返さない。結局、子供は死んでしまい、このときを境に怪異が始まる。彼が飼っている二匹の猫がどんどん大きく、そして凶暴になっていき、主人であるブーレマンを家の中に閉じ込めてしまう。しかも、天罰により死からも見放された彼は、化け物のような二匹の猫に暗い家に監禁され、永遠の孤独の中で生きることになる。

さて、本稿で主に取り上げることになる三つ目の物語、それが『ツィプリアーヌスの鏡』である。これもまた、いわゆるメルヒェンとは趣を異にしているが、かといって『ブーレマンの家』のような怪談風の話でもない。先に挙げたシュトルムの言葉から考えれば「伝説」の趣を呈していることになる。またこれを彼の後期作品群に多く見られる「歴史短編小説」の先駆けとみなすことも可能であろう³⁾。以下において具体的にこの作品を読んでいきたい。

II

この作品は、シュトルムが主にノヴェレの分野で得意とした枠物語の形式をとっている。枠の部分では全知の語り手によって現在の出来事が語られる一方、そこに登場する人物の一人が昔から伝えられるエピソードとして枠内物語を語るのである。

枠の舞台となっているのは伯爵の城の一室。幼い子供が生死の境をさまよっている。医者によれば回復の見込みはないという。この子供は伯爵の一人息子で、名をクーノという。彼を看病しているのは、乳母とそれから

彼にとって継母に当たる伯爵夫人の二人である。ほとんど寝ずに献身的な看病をする伯爵夫人の気を紛らわせるため、乳母がこの城にまつわる伝説を語って聞かせる。この乳母の語る話が枠内物語を形成する。

乳母が語るのは三十年戦争末期の話である。この城には心優しく、人々から慕われていた伯爵夫人がいた。彼女は悩みを抱えていた。それは夫である伯爵との間に子供がいないことであった。

あるとき、皇帝側についた夫の出陣中に、この伯爵夫人は傷ついた老医師ツィプリアーヌスを助ける。この老医師はスウェーデン軍につき従っていたのであり、本来であれば敵方の人間であるにも関わらず、彼女は彼を助けたのである。やがてツィプリアーヌスは、城を立ち去るに際して、自分が故郷に着いたなら、これまでの厚遇の礼として魔法の鏡を送り届けさせると約束する。そして鏡がやって来る。それに添えられたツィプリアーヌスの手紙には、この鏡によって伯爵夫妻は子宝を授かるであろうとの明るい予言と同時に、決して悪行を鏡に映してはいけないとの警告が記されていた。

しばらくして、伯爵夫人はツィプリアーヌスの鏡に子供の姿が映っていることに気付く。そしてとうとうクーノという待望の男児が生まれる。しかしながら、喜びもつかの間、伯爵夫人は一帯を襲った病によって他界してしまう。そこで伯爵は新たな妻をウィーンから迎える。しかしクーノは彼女を母とは認めようとしない。そのうち、この新しい妻にもヴォルフという息子が生まれる。新たな母を認めないクーノも、この腹違いの弟はかわいがり、二人は仲良く成長する。

やがて、ハーガーという大佐がやって来て、そのまま城にいついてしまう。ある日、伯爵は彼とともに出かけた狩猟の最中に、不運にも死ぬ。その後、ハーガーは城の実権を握り、ついには伯爵夫人と共謀してクーノを殺害。しかし、この凶行をツィプリアーヌスの鏡が映してしまっていたた

め、今度は鏡の呪いによりヴォルフもまた死んでしまう。ヴォルフ殺しをハーガーの仕業と考えて、彼を責めた伯爵夫人はハーガーに殺され、一族は全員いなくなってしまう。その後、主を失った城を引き継いだのが現在の伯爵の先祖というわけである。

枠内物語はこれで終わる。乳母の話を聞き終わった伯爵夫人は、一旦寝室へと向かう。彼女が退出した後、乳母はクーノがあのツィプリアーヌスの鏡の中に子供の姿を見てしまったことを知る。しきりに鏡の中の子供たちに会いたがるクーノを見て、彼女は鏡を病室に運び込ませる。クーノは鏡の中に彼らの姿を認めるが、彼らは去ってしまう。鏡の呪いが解け、クーノも回復する。

III

まずは一旦、物語の枠部分を取り外し、枠内物語を見ていきたい。これは、この作品が若干複雑な構成を持っていること、そして何より、乳母を除く三人の女性主要登場人物が固有名を持たず、「伯爵夫人」という呼称でもって呼ばれているという事情による。

先妻の子供が後妻の迫害にあって殺されてしまう。ツィプリアーヌスやハーガーといった重要な登場人物の存在を無視して、大雑把に枠内物語を要約してしまえば、このような至極ありふれた「継子いじめ」の物語の枠組みが浮かび上がってこよう。「継子いじめ」物語を盛り上げるためには、当然、先妻を善、後妻を悪として描くことが有効であろうが、この枠内物語もその要請に忠実に従っている。

枠内物語における伯爵の最初の妻に関して、語り手である乳母は彼女が優しい人間であるということを強調している。この第一の伯爵夫人は「その心は憤まじやかで、貧しい者、身分の低い者を軽んずるようなこともなく」、人々からは「よき伯爵夫人 (die gute Gräfin)」(IV133) と呼ばれて

いたという。また、このような直接的な形容を借りずとも、彼女にまつわる様々なエピソードから彼女の人となりを知ること出来る。たとえば、彼女が怪我をしたツイプリアーヌスを助けるという件からも、それは知られよう。敵であるはずの老医師を彼女は、自らの判断で助け、治療し、のみならず城に客人として逗留することを許すのである。彼女のこのような姿勢はその死に至るまで一貫している。彼女は村を襲った熱病によって命を落とすことになるのだが、これも彼女自身の優しさに原因の一端がある。彼女は病に苦しむ人々の看護にわざわざ自分から赴き、皮肉にもその献身的行為によってこの病を得てしまったのである。

これに対して後妻としてウィーンから招かれた女性は常に否定的に描かれる。語り手の乳母は彼女の容姿について語る。というのも、彼女の姿を描いたと言われる絵が城に残っていたのである。それによれば、この女性は「赤みがかった金髪」の持ち主で、絵の中の彼女は「頭を少しばかり後ろに反らせて、口元には甘いと同時にどこか意地悪そうな微笑を浮かべている」(IV141)という。彼女の金髪は結われてはいないが、これは彼女がここで官能的な誘惑者として暗示されていることを表している。乳母は、彼女が表面的には美しく魅力的——特に男性にとって——であると認めながらも、実は高慢で冷酷で淫らな女であると示唆しているのである。

絵に描かれた女の容姿を述べた後で、乳母は更に彼女がそもそもどういう立場にあった人間なのかということについて言及する。

これだけは付け加えておきましょう。彼女は若い未亡人だったのです。最初の結婚で生まれた子供——女の子ですが、その子を帝都の亡くなった旦那さんの親戚のところに残してきたのだそうです。(IV141)

娘を捨ててきたという事実もまた彼女の心の冷たさを証明する。ちなみに、樺物語の伯爵夫人はこの捨てられた娘の子孫であるということが後に判明

する。

豪華な家財とともに伯爵の城に興入れしてきたこの女性は、実は人々からおおむね好意的に迎えられている。以前の伯爵夫人と同じように好ましい人物として受け止められているのである。しかしながら、やはり両者の間には違いがあり、それを人々は漠然と感じ取っている。

奉公人たちは彼女の愛想のよさを褒め、村の貧しい人々もやがて、「亡くなられた方〔以前の伯爵夫人〕より気前がいい」と言うようになった。

「ただ、あの方は子供たちには目もくれないし、前のよき伯爵夫人と同じようには、あの方に窮状を訴えるわけにはいかないな。」(IV142)

新しい伯爵夫人の欺瞞をしっかりと鋭い感受性や観察眼で見抜いていたのは、彼女を新しい母親としなければならなかった幼いクーノと、ずっと伯爵家に忠実に仕えてきた年老いた家令の二人であった。彼女はクーノを自分になつかせようと「彼〔家令〕や伯爵のいるところで」(IV142) この少年をしきりに愛撫したりするが、その行為は家令やクーノにとっては信用するに足らぬものである。家令や伯爵の視線が前提となっている限りにおいて、このスキンシップが極めて演技性の高いものであることが窺える。そもそも家令がまず彼女に抱いた不快感は、彼女が祝日でもないのに着飾っているということにあった。これが外面の過剰装飾とすれば、クーノや村人に対する彼女の親しげな態度は内面の過剰装飾と呼ぶことが出来るだろう。

彼女の内面の装飾が本格的に綻びを見せるのが、病に倒れたクーノを彼女が看病する場面である。

そのとき、少年は熱に浮かされて「お母様、お母様！」と大声を上げ

た。そして目を開き、布団から身を起こした。

「お聞きになれましたか、あなた」美しい妻は言った。「私たちの息子が私を呼んでいますわ」

しかし、彼女が立ち上がって子供の方へ身を屈めたとき、彼は彼女を無視して、その腕をよき伯爵夫人の今は誰も座っていない椅子へと伸ばしたのだった。

[……] 彼女は部屋を出て行った。そして再び部屋に来ることはなかった。(IV143)

最初の伯爵夫人は、ツィプリアーヌスの場合のように、たとえ相手が敵であろうと救いの手を差し伸べた。また、その後に何の益も与えてくれない、死にゆく重病患者を優しく看取ることも厭わなかった。そこには見返りを必要としない彼女の愛情といったものが見て取れる。しかしながら、今度の伯爵夫人にそのような愛情が備わっているようには思えない。クーノのベッドの傍らに彼女がいるのは、この継子への愛情からではなく、ある種の義務感からに過ぎない。だからこそ、クーノが謔言で母を求めると、彼女は彼を心配するのではなく、自分が母親として認められたことをこそ喜び、やがてそれがぬか喜びと知るや、怒りと悔しさから部屋を退出することを躊躇しないのである。

心優しく善良で慎ましくやかな以前の伯爵夫人、そして、見た目には同様に善良そうに見えながら実際は冷たく、強い虚栄心を抱いている現在の伯爵夫人。この二人の作り出すコントラストを背景として、枠内物語は「継子いじめ」の一般的展開に従って破局へと向かうことになる。

IV

さて、ここでいったん枠内物語から枠物語へと目を転じてみよう。この

杵物語においても継母継子の問題が前面に現れている。しかも彼らの人間関係は杵内物語のそれとそっくり相似形をなして重なり合う。たとえば、伯爵の最初の結婚から生まれた子供の名前はいずれもクーノである。伯爵は妻に先立たれた後、残された子供に母親がいなくてはならないと考えて二回目の結婚をするのも、共通している。そして、この二人目の妻はどちらもともに同じ一族の血を引いている。このような一致が重なってくると、読者はこの杵物語が運命悲劇的展開をするのではないかと自ずから考えよう。すなわち、杵内物語の展開がそうであったのと同様に、杵物語も決定的な破局——この場合はクーノの死——によって幕を閉じるという可能性が想定されてしまうのである。

しかしながら、最終的にはこの破局は回避される。なぜならば、杵物語と杵内物語には多くの共通点、一致点があるにも関わらず、ある一点では大きく異なっているからである。その最大の相違点こそ、後妻として伯爵家にやって来た伯爵夫人二人の性格であろう。同じような立場にありながら彼女たちはその内面において決定的な差異を有している。

杵物語の伯爵夫人がこの家へ嫁いでくる経緯は少々複雑である。そもそも伯爵と最初に結婚するはずだったのは彼女である。ところが、別の女性が伯爵を彼女から奪うようにして、彼と結婚してしまった。この女は伯爵との間にクーノを儲けるものの、その直後に産褥熱で死亡してしまう。そこで伯爵は、幼いクーノにとってこれほど母親にふさわしい者はないだろうと、かつて自分が捨てた女性を妻に迎えることとする。「彼女は、穏やかな心で、彼の全ての無礼を許し、ここに彼の妻となったのである」(IV132f.)。

杵物語には、この伯爵夫人が継子であるクーノの看病に力を尽くしている様子が描かれている。ただし、彼女にとってこのクーノという少年は、彼女の血が流れていないという、ただ単なる継子ではない。上記のような

事情を斟酌すれば、当然、憎んでも憎みきれない「彼女のかつての恋敵の子供」(IV133)ということになる。にも関わらず、彼女にはこの子供に対する憎悪や嫌悪感は、一切見られない。それどころか、彼女はこの子が謎の病に倒れると必死になって彼を助けようとしているのだ。その真剣さは彼女が、乳母がどれほど強く勧めようとも、休憩や睡眠をなかなかとうとうとしないことから窺える。このような態度は枠内物語での後妻の伯爵夫人には見られない。先に見た通り、同じように継子を看病するというエピソードがあったが、そこでは彼女は、その子供が彼女を母として認めようとしなが故に、彼を見捨てるのである。むしろ枠内物語においては、最初の伯爵夫人の態度が、枠物語の伯爵夫人のそれと対応していると言うことが出来る。枠物語と枠内物語の関係は形の上では相似でありながら、実はここに大きなねじれを内包してしまっている。そして、そのねじれこそが枠物語を——ひいてはこの作品全体を——救済の方向へと導いた原動力ではなかったか。

あるいは鏡という物語の小道具に引き寄せて考えれば、次のように言うことも可能かもしれない。枠物語は枠内物語を引き写したものである。しかし、ただ引き写したわけではない。この両者の間には一枚の鏡が立っている。どちらが原像でどちらが鏡像かは判然としない。しかし、そこに立ち現れる像はどちらも同じように見えながら、実は左右が逆転してしまっている。一方においては、優しい第一の伯爵夫人と偽善的で尊大な第二の伯爵夫人。もう一方においては、財産欲から他人の婚約者を奪う第一の伯爵夫人と寛大な心を持った第二の伯爵夫人。像のこのような反転によってそれぞれの物語は、一方では悲劇的破局、もう一方では救済へと分岐することになったのだ。

いずれにしても、物語の最終的な救済にとって最も大きな役割を果たしたのは、乳母の「クーノ様は助かった。[……] あなた様の愛のおかげです

よ」(IV156)という言葉を待たずとも、枠物語の第二の伯爵夫人であることに異論の余地はなかろう。彼女の人間的な優しさが鏡の呪いを解き、その呪縛からかつてのクーノとヴォルフを解放したのである。そして、そのような人間性——あるいは「愛」——はまた、『雨姫』において旱魃に苦しむ村に慈雨をもたらし、その欠如の故に『ブーレマンの家』の主人公はおぞましい罰を受けねばならなくなったのである⁴⁾。

V

シュトルムが『三つのメールヒェン』を刊行したのは1865年の暮れであったが、ちょうどこの年の五月、彼が深く愛していた妻コンスタンツェが産褥熱によって他界している。シュトルムは彼女の死を深く悲しんだ。ところが、翌1866年、彼はドロテアという女性を後妻に迎えている。実は、シュトルムはコンスタンツェとの結婚後、一時的にこのドロテアという女性と恋愛関係に陥っていた。当時は結局、半ば当然ながらドロテアと別れ、シュトルムは元の家庭に戻る事となったのだが、その女性を彼はこの度、新たな妻としたのである。愛妻の死後すぐに後妻を娶ろうと考えた直接の動機は、『ツィプリアーヌスの鏡』の伯爵と同様、子供の養育のためである。

もちろん、シュトルムはこの経験を元に『ツィプリアーヌスの鏡』を書いたわけではない。そもそも、このメールヒェンはコンスタンツェの生前、既に書かれていたものである。彼女自身がこの作品を気に入っていたという⁵⁾。おそらくは、この時期に、シュトルムは既に継母継子の問題に意識が向いていたのであろう。ただし、それは未だに十全な問題意識としては成熟していなかったように見える。

というのも、たとえば、枠内物語における二番目の伯爵夫人の描き方などは少々継母という類型に忠実に過ぎる印象を拭えない。また、女性の側

の問題だけではなく、男性の側の問題も残されたままである。具体的には、彼女たちを迎える伯爵とはいったいどのような人物なのかということである。棹内物語の伯爵は、二人目の妻を子供のために迎えるが、しかし、その心の奥では「子供に母を、お前に妻を。女の愛は甘き蜜のごときものなれば」(IV140)との声を聞くのであり、子供のためという理由がどこか建前じみたものであることを彼自身、自覚している。また、病床のクーノによって、この子の母親が先妻一人であるように、自分にとっても妻は彼女しかないと気付かされ、後妻への熱情がすっかり冷めるのみならず、この後妻との間に出来たヴォルフさえ自分の子と思えないというのは、あまりに勝手な言い分ではあるまいか。

同様に、棹物語の伯爵も、いったん取り決めた婚約を破棄して別の女性と結婚し、その女性が死んだら子供のためと、かつての婚約者を後妻に迎えるというのはやはり奇妙であろう。更に穿った見方をするならば、大切な子供が臥せっているにも関わらず、一切、父親である彼が病室に姿を見せないというのも不思議である。

全体として継母継子の軸が強固であるがために父親の存在が脇にやられてしまったからであろうか、とにかく棹内物語、棹物語を問わず、伯爵の描かれ方には問題が残る。

あるいは、継母継子の問題がシュトルムの中で十分に醸成されるもう少し時間が必要であったのかもしれない。コンスタンツェの死、ドロテアとの再婚という実体験が反映された作品として、1873年、彼は短編小説『三色すみれ』 *Viola tricolor* を執筆、翌年に発表する。継母と継子、そして二人の間に立つ夫、その三者三様の複雑な心理が細かく描かれ、そこでは『ツィプリアーヌスの鏡』に見られるような善と悪の二元論的意味づけは完全に失効する。

しかしながら、当然、このメールヒェンから受け継がれたものもある。

それは、もはや「家族」が所与のものとして存在しているわけではないという認識である。そもそも、『三つのメールヒェン』収録の三篇いずれにも家族の問題が大なり小なり絡んでいる。『雨姫』では、マーレンは実の父親を裏切ることによってアンドレースと新しい家族を作ることになる。『ブーレマンの家』では、たとえ血の繋がりがあろうとも、それがお互いに支えあうという家族を形成する条件にはならないことが、甥を死なせてしまうブーレマンという男の姿を通して示されている。そして、『ツィプリアーヌスの鏡』では、たとえ血がつながっていなくとも、人間的な心を忘れずに相手と接することで家族を作り上げてゆくことの可能性が示唆されている。

家族は無条件に成立するものではない。その成員の寛容な精神と努力によってこそ彼らは家族たりうるのである。後の『三色すみれ』において改めて明確になるこのような家族観は、シュトルムの人間性への深い信頼と洞察、そして辛い自分自身の経験に基づいたものであったに違いあるまい。

テキスト

シュトルムのテキストは以下のものを用い、引用箇所については引用文の直後の括弧内に巻数とページ数を記した。

Theodor Storm: *Sämtliche Werke in vier Bänden*. Hrsg. von Karl Ernst Laage und Dieter Lohmeier. Frankfurt am Main 1987-1988.

注

- 1) Vgl. Franz Stuckert: *Theodor Storm. Sein Leben und seine Welt*. Bremen 1955, S. 38f.
- 2) このことは『三つのメールヒェン』序文だけでなく、『樽物語』序文においても再び言及されている。
- 3) Vgl. Stuckert: a. a. O., S. 287.
Vgl. Ingrid Schuster: *Theodor Storm. Zeitkritische Dimension der Novellen*. Bonn 1971; 2. Aufl. 1985, S. 125.
- 4) ちなみに、チョルンはこの『ツィプリアーヌスの鏡』の解決に貴族と市民の関係を読みとっている。彼は、よき伯爵夫人や現在の伯爵夫人の人物

像に市民層の人間的理想を重ね合わせ、この理想の介入によって貴族階級の決定的没落が防がれるのだと考えている。他に、シュースターなどもこの作品を貴族の問題に結びつけている。

Vgl. Wolfgang Tschorn: *Idylle und Verfall. Die Realität der Familie im Werk Theodor Storms*. Bonn 1878, S.102f.

Vgl. Schuster: a. a. O., S. 125.

- 5) Vgl. Theodor Storm—Hartmuth und Laura Brinkmann: *Briefwechsel*. Hrsg. von August Stahl. Berlin 1986, S. 144.

(大学院博士課程単位取得退学)

SUMMARY

**„Der Spiegel des Cyprianus“
Das Stiefmutterproblem bei Storm**

Takashige YAMASHIRO

Storms „Der Spiegel des Cyprianus“ ist eines seiner „Drei Märchen“ (1865). Das Märchen ist in zwei Teile gegliedert: Rahmenerzählung und Binnenerzählung. In der Rahmenerzählung wird die Szene, wo die Gräfin und die Amme in einem Gemach eines Schlosses einen sterbenden Jungen namens Kuno pflegen, beschrieben. Und in der Binnenerzählung wird ein Vorfall, der einst in diesem Schloß stattfand, erzählt. Vor über hundert Jahren wurde ein Kind, dessen Name auch Kuno war, von seiner bösen Stiefmutter getötet. Weil der Mord vor dem Zauberspiegel begangen wurde, sind die Familie und das Schloß mit einem Fluch belastet. Durch diesen Fluch leidet der Kuno in der Gegenwart an einer unerklärlichen Krankheit.

Vielleicht müßte man das Märchen als eine Art Schicksalstragödie lesen, da Übereinstimmung der Namen, Mordtat oder Fluch Merkmale einer Schicksalstragödie da stellen. In diesem Fall müßte die Rahmenerzählung ebenso katastrophal enden wie die Binnenerzählung. Aber schließlich wird die Katastrophe, d. h. Kunos Tod, doch vermieden und der Fluch verlischt.

Eigentlich entstammt der Fluch dem Konflikt zwischen Stiefmutter und Stiefkind. Das Schema der Binnenerzählung, Stiefmutter *gegen* Stiefkind, aber wird in der Rahmenerzählung nicht aufgenommen. Hier kommt das neue Schema, Stiefmutter *für* Stiefkind, zum Tragen, indem die Gräfin den kleinen Kuno retten will. Der Übergang des Schemas, bzw. die Veränderung des Gemütes von Haß zu Liebe, verhindert, daß das Märchen schicksalstragisch wird. Es entsteht eine Beziehung zwischen Stiefmutter und Stiefkind, die tiefer geht, als Blutsbande zu schaffen vermöchten.

Die Familie ist keine durch Blut verbundene Gemeinschaft mehr, sondern die Mitglieder einer Familie, auch wenn sie keine Blutsverwandten sind, müssen diese Gemeinschaft durch ihren guten Willen und

stete Anstrengung bilden und erhalten. Storm entwickelt später das Thema in der Novelle „Viola tricolor“ (1873) noch viel weiter.

キーワード：シュトルム, メールヒェン, 継母, 家族